

「数理科学」は語る

30年前から現代へのメッセージ

海老原 直邦

1980年3月号

30年前の本誌3月号の特集は「記憶」であった。目次を見ると、記憶の心理、神経生理、記憶の病理や計算機における記憶の問題など、そのテーマも多彩で、現在でもなお参考とすべき内容が多く含まれていると思われる。その中で筆者が担当したのは、単一音や比較的単純な音の系列（メロディー）の記憶、すなわち「非言語音」の記憶の心的機構について、心理学的な実験データに基づいて種々論じた論文である。

実験心理学の分野では、当時から、認知過程の性質を情報処理という観点から解明する研究が盛んであり、筆者の論文も、非言語音の記憶過程を大きく①感覚レベルでの一時的な聴覚的情報保存、②短期的な聴覚記憶、③長期的な聴覚記憶の3つの情報処理段階に分けて、各段階に保存された聴覚情報の性質を検討したものであった。この論文では、言語材料の記憶との比較が随所でなされているが、言語の処理と非言語音の処理の相違を、「ハードウェア」としての）大脳の左右半球の機能差と関連づけた考察も行っている。

論文では、音楽の記憶に関連する研究の紹介もあり、個人の経験や好みが音楽の記憶に及ぼす影響についての言及なども多少含まれるが、全体としては、音の記憶メカニズムそのものに限定した記述が中心となっている。すなわち、記憶の機能を「知」の情報処理の側面に限って検討し、「情」や「意」の働きとは無関連に考えを進めて、人の認知機能をコンピュータ類似の情報処理システム、いわば「冷たい認知」のシステムと見なした論述になっている。これは当時の認知研究の全体的傾向の反映だとも言えるだろう。

さて、現在とはいうと、記憶など認知の働きを、情意システムから分離独立したシステムとしてではなく、感情や動機あるいはパーソナリティや環境条件（状況）との関連性の側面から理解しようとする傾向が強くなってきたようである。言い換えれば、以前に比べて、認知機能と他の心的機能との「関係性」を重視するようになってきている。実験室の中ではなく、社会の中で生



きて行動している人間の心的特性をリアルに正しく捉えるためには、認知過程に実質的な影響を及ぼす様々な変数を可能な限り取り入れた、多面的なアプローチが確かに必要であろう。

ポジティブ（ネガティブ）な気分状態のときには、ポジティブ（ネガティブ）な感情価をもつ単語の記憶が促進されるというような「気分（感情）一致効果」が確認されているが、これは、まさに「情」が「知」に作用するよい例であろう。このような認知のことを特に「温かい認知」と呼び、現在、多くの認知研究者が取り組む、ホットな研究テーマになってきている。

（えびはら・なおくに、富山大学人文学部）